

附属横浜小学校の取り組み

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校

校長 丹治 陽子

〔集团的叡智〕

先日、内田樹氏のブログの「ネット時代の共生の作法」の中で「集团的叡智」という言葉に出会った。「人間が能力を開花させるのは自己利益のためではなくて・・・まわりの人たちと手を携えて、集団として活動するとき」なのだと言内田氏は言う。ひとりひとりが自分の能力を高めることはもちろん重要である。しかし個人の高い能力も、他者の異なる能力や資質と出会い、それらと互いに触発し合うことではじめて、成長してその集団にさらに高い叡智をもたらすようになる。そのようなプロセスをたどることで、それは長期的に見れば「エゴイズムや暴力や社会的不正」を正す力、集団を律する力になるのだ。だからこそ学校では、「自分とは異質の能力や個性を持つ子どもたちと協働して、集団的なパフォーマンスを高めるための技術」、「集団として支え合って生きていく共生の知恵」を子どもたちに教えなければならないというのだ。横浜小学校の取り組みは、このような「集团的叡智」を目指すものとして説明できるのではないかと思う。

〔共に生きる、共に学びをつくりあげる〕

横浜小学校はこれまでそれぞれの時代の先進的な研究に取り組んできたが、常にその研究の中心にあるのは、教師がひとりひとりの子どもをしっかりと丁寧に「見とり」、学びの手立てを考え、集団の中で子どもたちが生き生きと活発にかかわりあうことによってよりよい学びが構築されるように教育をデザインするという姿勢である。過去にさかのぼって本校の研究の方向性を見てみると、1980年代半ばには「共同体の中で『共に生きること』の意味を理解させること、「共に生きる力」を育成することが目標とされていた。また、1990年代半ばからは、「共に学びをつくり上げる力（自己決定力・自己責任能力/かかわりあう力）」の育成をめざし、それを「学力」として位置づけている。

このように、ひとりの子どもの中だけで始まり完結する学習や学びではなく、集団の中で互いにかかわりあうことをとおしてはじめて可能になる子どもたち全体の知の世界の拡大・拡充、そしてそれと同時にひとりひとりの子どものなかでおきている知の世界の拡大・拡充をめざすことこそが、横浜小学校に現在まで引き継がれてきた学びの在り方である。そしてその根底には、友達とかかわり合い、共に学び合うことにより思考を深め、的確な判断を下して問題解決をしたときの喜びや達成感・充実感を子どもたちに味わってほしいという願いがあるのだ。

〔「生きる力」をはぐくむ〕

平成20年3月に改訂、平成23年4月より小学校で全面実施された新学習指導要領は、「生きる力」をはぐくむという理念のもとに、「基礎的・基本的な知識や技能の習得」と「思考力・判断力・表現力の育成」の両方を重視している。このうち「基礎的・基本的な知識や技能の習得」の達成度については従来のペーパーテストで検証することが可能であろう。また、「思考力・判断力・表現力の育成」の達成度も、基礎的知識を応用して課題解決能力を問う記述式のペーパーテストで検証できるだろう。しかしそれらが本当に「生きる力」につながっているかということは、机上ではなく、実際に人間同士がぶつかり合う場面でなければ検証できないのではないだろうか。横浜小学校が追求してきた「共に学びをつくりあげる」という学びのあり方は、まさにそのような場面を教室の中に作り、異なる考えを持つ子供たちが話し合い、知恵を集めてよりよい解決の道を探ることをとおして「生きる力」をはぐくむことを目的としていると言ってもよいだろう。ペーパーテストでは測りがたいこのような力の表出を見とり、それをさらに育むための手立てを模索する研究の中で、「共に学びをつくりあげる力」がどのようにはぐくまれていくのかを明確に分析・検証

するための観点として、「ベース力（りょく）」が平成21年度から導入された。

[ベース力（りょく）]

「ベース力」とは、1.「見つける力」、2.「よりどころを持って考えを決める力」、3.「受けとめる力」、4.「伝える力」という4つの力から構成されるものであると定義されている。

1の「見つける力」とは「クラスや自分の問題や課題、学習活動を見つける」力であり、子どもが主体的・能動的に学ぶ姿勢を示しているかという観点であろう。2の「よりどころをもって考えを決める力」は「自分の体験や経験、友達の発言や客観的情報などをよりどころにして、自分のイメージや思いを持ったり、考えを決めたりする」力であり、子どもが自分なりの根拠に基づいて学びを積み上げているのかという観点であろう。さらに子どもがこの1と2の力を発揮できるようになるために必要な5つの要素として、学習や活動について「見通しを持つ力」、適切な「情報を選ぶ力」、複数のものや自分を「比べる力」、「他者の良さに気付く力」、次の学習や活動に「学習及び生活経験をを用いる力」が挙げられている。

3の「受け止める力」は他者の「思いや考えを受けとめる」力であり、他者との違いに気付き、それを自分の考えなどと比べることにより自分なりの決定・選択をすることを可能にする前提として必要な力である。4の「伝える力」は、相手に自分の考えを明確に理解してもらうことが意識的に行えているかという観点であり、この力が養われることにより、3の「受け止める力」も強くなりうるのである。またこれらの4つの力は互いに関連しており、そのどれが欠けても論理的に積み上げられた確かな学びに到達することはできなくなるし、それらの力が弱ければ学びのレベル自体も低くなってしまふのである。したがって教師は単元構想を練るとき、授業分析をおこなうときに以上の4つの観点を柱として綿密な見

通しを立て、振り返りをするのである。

[学びの土壌と学習のステージ]

分析の観点がいくら立派でも、学びの主体である子どもたちが元気でなければ良い授業はできない。学びたいという意欲を持ち、学びを共に協力して作り上げる子どもの集団を本校では「学びの土壌」とよび、「粘り強さ」「知的好奇心」「適度なこだわり」「自己肯定感」「共感」「積極性（やる気・勇気・自信）」を持つ子どもという豊かな土壌を用意することにも力を注いでいる。

また、意欲的な子どもたちがより確かな「ベース力」を身につけそれを発揮する場面を持つためには、力を発揮できる場が十分に用意された「吟味された学習材」が必要だ。それを用意するために、教師はあらゆる学習活動の中で子どもをよく見とり、教師同士でその情報を共有している。1, 2年生の生活総合科と3年生以上の総合単元学習は主に「ベース力」をはぐくみ発揮することをねらいとし、そこで高められたベース力を各教科学習で用いて単元目標・本時目標の達成をより確実に実現しようとしている。

[地域との連携]

「ベース力」をキーワードにした本校の研究が長年にわたって積み上げられてきたのは教員ひとりひとりの熱意と、同僚性の高さであろう。本校の教職員は神奈川県、横浜市、川崎市、相模原市の教育委員会から推薦を受け、5～6年間本校に勤務する。その間、教育人間科学部の教育実習生を毎年指導し、未来の優秀な教員の養成に一役買っている。また、大学教員を講師として招いた授業研究、県内外の研究会への参加、県内外の学校での授業指導、本校を拠点とする研究会の企画運営、そしてその総まとめとしての毎年1月の研究集会を行っている。附属勤務を終えた教員は附属で身につけた新しい教育理念と方法を携えて地元へ戻り、そこで指導的な役割を果たし、県下の教育のレベル向上に貢献している。